

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 30 日現在

機関番号：30110

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520827

研究課題名（和文） マルセイユのコモロ系移民と故郷との紐帯に関する人類学的研究

研究課題名（英文） The anthropological study of the solidarity between Comorian Diaspora and their home village.

研究代表者

花渕 馨也（HANABUCHI KEIYA）

北海道医療大学・大学教育開発センター・准教授

研究者番号：50323910

研究成果の概要（和文）：マルセイユのコモロ系移民のコミュニティでは、90年代から、同じ村出身者による同郷組合の組織が急激に増加した。同郷組合の活動の中心は、故郷村への援助活動であり、「援助文化」として新たに創造された、資金を集めるためのイベントを頻繁に開催している。本研究では、同郷組合活動の実態の分析を通じ、移民と故郷は村の伝統的社会構造を再編成するトランスナショナルなコミュニティを形成する一方で、援助をめぐる威信競争による新たな社会関係が生じることで位階的な社会構造に変化が起こりつつあることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

Among the Comorian immigrant community in Marseille, the migrant hometown associations have increased rapidly from the 90's. The primary activity of the association is the aid to a hometown. They frequently organize a fund-raising event that was created as a new "Aid Culture". In the present study, through the analysis of the realities of migrant hometown association, I showed that on the one hand Comorian immigrant and their hometown form a transnational community that reform a traditional social structure. On the other hand, I also pointed out that a change is taking place in the hierarchical social structure through the new competition for honor in the aid activity to hometown.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学、文化人類学・民俗学

キーワード：移民、故郷、アソシアション、同郷組合、トランスナショナルリティ

1. 研究開始当初の背景

研究者は、2006年以降、フランスのマル

セイユ市におけるコモロ人移民コミュニティの調査を開始した。90年代以降のフランス

における移民によるアソシエーション活動の活発化、およびグローバル化による移民と故郷との紐帯の緊密化や、海外移民による故郷の開発援助に対する国際機関による後押しなどの動きなどの影響を受け、2000年代には、コモロ人移民による同郷組合の組織化と、故郷への援助活動が活発に行われるようになった。コモロ人移民についての研究は少なく、特に、コモロ人移民による同郷組合活動の実態についての研究はほとんどなかった。

2. 研究の目的

本研究は、南フランス・マルセイユ市に住むコモロ系移民と、その故郷である東アフリカ・コモロ諸島の村社会との多層的紐帯の生成に関する人類学的研究である。マルセイユにおける移民コミュニティとコモロ本土での現地調査に基づき、両地域を結ぶ移民ネットワークにおける同郷組合の援助活動から個人による故郷への投資に至る多様な紐帯の生成を具体的に検討し、グローバリゼーションの変動による人の移動が切り拓くコモロの新たな社会空間の登場と、その中で個と共同体の再編成の動態について明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

マルセイユのコモロ人コミュニティ、およびグランドコモロ島の村落においてフィールドワークを行い、人々からの聞き取り調査、同郷組合活動の参与観察、新聞や雑誌、インターネットなどの情報収集、行政資料の収集などを行った。

4. 研究成果

(1) 各年度の研究成果

各年度の調査実施と研究内容は下記のとおりである。

<H21 年度>

フランス・マルセイユ市において、平成21年2月5日から3月5日までの約1ヵ月間、コモロ系移民の社会的紐帯に関する調査を実施した。調査では、マルセイユ市の中央地区にある公営低所得者用住宅（HLM）に多く住む主にグランドコモロ島出身者を対象とし、同じ島や村、地区などを単位としたコモロ系移民による同郷組合（Association）の組織とその活動についての聞き取り調査を行った。

その結果、マルセイユのコモロ系移民全体の組織とした活動してきた FECOM が2001年に解体するなど、90年代後半までのコモロ系移民の増大や、第二、第三世代の登場による移民の生活様式の多様化により、マルセイユのコモロ系移民のネットワークは、より小規模な地域や村を単位とした無数の同郷組合

へと分化する傾向が見られることが分かった。また、そうした小さな同郷組合は、故郷村への援助資金調達のため毎週のように様々な行事を開催するなど活発な活動を行うことで、第二、第三世代の若者もそのネットワークにとり込み、移民集団内部での連帯を築くとともに、移民と故郷との強い紐帯を維持し、再生産していることが明らかになった。

<H22 年度>

本年度の研究では、現地調査による資料収集と、その調査データに基づく同郷組合の活動実態の解明を進めた。平成23年3月3日から3月25日までの約3週間、フランス・マルセイユ市におけるコモロ系移民コミュニティの調査を実施した。調査では、90年代以降に急激に増加した、故郷村や地域を単位とした同郷組合（Association）の組織化と変化について、複数の同郷組合のメンバーから聞き取りを行った。

また、グランドコモロ島・マジェウエニ村の同郷組合組織（Alwatan Noir）について集中調査を行い、故郷村との政治的、経済的結びつきの実態と、故郷村への援助を目的として毎週のように開催される三種類の行事マジリシ（Madjilissi）、ワダハ（Wadaha）トアラブ（Toirabu）における参加者の属性、事務的手続き、参加を通じた関係の広がりなどについて聞き取りを行った。調査により、故郷村の長老会議を中心とした伝統的ヒエラルキーをもつ政治構造を保ちながらも、援助への貢献度における同郷移民間の「名誉」をめぐる新たな競争的關係が発生しており、それにより、マルセイユのコモロ系移民社会には、独自の社会関係が生成していることが明らかになった。

<H23 年度>

本年度は、これまでの調査データを補完する為、平成23年12月21日から平成24年1月20日までの期間、フランス南部・マルセイユ市におけるコモロ系移民の同郷組合活動についての現地調査を実施した。

調査では、ムワリ島からの移民コミュニティ、およびンガジジャ島のS村からの移民コミュニティにおいて集中的に聞き取りを行い、特に、同郷組合活動における参加者の社会関係と、同郷組合における募金活動の実態と、その資金の流れや援助の具体化のプロセスについて明らかにした。

調査資料の検討から、グローバル化にともなう移民と故郷とを結びつける環境の変化にともない、両者の関係はより緊密なものになっており、特に、1990年以降に急激に増殖し、顕在化した同郷村のアソシエーションの活動を通じ、コモロ系移民と故郷とのトランス

ナショナルな紐帯が維持されているだけでなく、故郷村への援助を目的とした集合的な「援助文化」の形成と、「援助」という贈与交換を通じた新たな共同体の形成がみられることが明らかになった。

(2) 全体の総括

グローバル化が進行し、移民と故郷とのコンタクトや移動がより容易で頻繁になるに従い、両者の関係はより緊密なものとなりつつあり、それに伴い、新たなトランスナショナルなコミュニティが再編成されようとしている。本研究では、こうした動きの一つの事例として、コモロ諸島からフランスのマルセイユに移住した移民と故郷村との関係を対象とし、フィールドワークによる調査資料に基づき、人々の日常の実践からトランスナショナルな共同性が構成される仕組みについて捉えようとしてきた。本研究で明らかにしたのは下記の点である。

① コモロ諸島のグランドコモロ島およびモエリ島からフランス・マルセイユ市への移民の歴史過程

② 移民のライフヒストリーと移民コミュニティへの参与

③ 移民によるアソシアシオンの組織化の過程

④ 村の年齢階梯制度に基づく同郷組合の組織構成とその活動実態

⑤ 同郷組合による故郷への援助活動の実態と故郷村の社会変化

⑥ 援助によって結ばれる移民と故郷とのトランスナショナルな紐帯と社会構造の再編成

⑦ 援助による威信競争と新たな社会関係の登場による変化

以上の諸点について検討することで明らかとなったのは次のことである。

マルセイユのコモロ系移民（特にグランドコモロ島からの移民）は、アンダ (Anda) という年齢階梯制度によってきわめて位階的な社会構造をもつ村 (Mdji) に帰属し、その社会構造に組み込まれており、同郷組合への参与や援助活動を当然の行為とする文化的規範を維持している。それによって、同郷組合の活動を通じて、移民と故郷とは、村の社会構造に基づいたトランスナショナルな共同体を形成している。しかし、同郷組合による新たな「援助文化」の創造は、援助活動への寄与による威信をめぐる競合関係を生み出し、年齢階梯制度による社会構造にそぐわない新たな地位関係を登場させることで、共同体に変化をもたらす現象も見られるようになってきている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

① 花渕馨也、サベナの帰郷— マジュンガにおけるコモロ人虐殺事件の記憶と忘却 —、国立民族学博物館調査報告、飯田卓編『マダガスカル地域文化の動態』、査読有、103巻、2012、275-296

② 花渕馨也、不確かな他者として振舞う技法— コモロにおける精霊憑依と自己変容—、文化人類学、査読有、74巻(3)、2009、459-477

〔学会発表〕(計3件)

① 花渕馨也、援助文化の創造：マルセイユのコモロ系移民による同郷組合活動、日本アフリカ学会第49回学術大会、2012、国立民族学博物館、大阪府

② 花渕馨也、マルセイユのコモロ系移民における「つながり」の形成と変容、大阪大学 GLOCOL・大阪大学 COE プログラム「コンフリクトの人文国際研究教育拠点」共催・第70回 GLOCOL セミナー、2011、大阪大学、大阪府

③ 花渕馨也、グローバル化の中のコモロ諸島—マルセイユにおけるコモロ系移民の同郷組合活動、日本島嶼学会、2011、徳之島魚津生涯学習センター、鹿児島県

〔図書〕(計2件)

① 花渕馨也、御茶の水書房、「コモロの三くだり半事情」、椎野若菜編『「シングル」で生きる：人類学者のフィールドから』、2010、168-179

② 花渕馨也、春風社、結婚しない女と嫉妬する精霊：コモロにおける精霊憑依と人生の生き方、『宗教の人類学』吉田匡興・石井美保・花渕馨也共編、2010、127-156

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

花渕 馨也 (HANABUCHI KEIYA)
北海道医療大学・大学教育開発センター・
准教授
研究者番号：50323910

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：